

「ヒンデンプルク崇拝」から「ヒトラー崇拝」へ

原 田 一 美

Vom “Hindenburg-Kult” zum “Hitler-Kult”

HARADA Kazumi

Resümee

Der “Hitler-Kult” hat, wie Ian Kershaw in seiner Untersuchung über den “Hitler-Mythos” ausführlich nachgewiesen hat, im “Dritten Reich” als Integrationskraft eine maßgebende Rolle gespielt. In der Frühphase der Nazi-Zeit mußte sich Hitler jedoch eine andere Autorität entleihen. Dabei hat er sich die Popularität des Reichspräsidenten Hindenburgs nutzbar gemacht, der als “Sieger von Tannenberg” und “Vater des Volkes” in der Weimarer Republik weitgehend von vielen Deutschen verehrt wurde.

Die vorliegende Arbeit behandelt diese zwei “Kult-Erscheinungen” (“Hindenburg-Kult” und “Hitler-Kult”). Dabei möchte ich zeigen, wie geschickt Hitler den “Hindenburg-Kult” benutzt hat, um den “Hitler-Mythos” bei den Deutschen zu verankern.

Schlüsselwörter : “Hindenburg-Kult”, “Hitler-Kult”, Führersuche

「ヒンデンプルク崇拝」, 「ヒトラー崇拝」, 指導者待望

はじめに

1933年3月, ヒトラー政権掌握後, 最初で最後の「自由」選挙が行われ, ナチ党は43.9%を獲得したが, 過半数には届かなかった。ヒトラー政権初期には, まだ半数以上のドイツ人がナチ党を支持していなかったのである。ナチ党の反対者のあいだでは, ヒトラー内閣もそれまでの内閣と同じように長くはもたないだろうという期待の声も聞かれた。ところが, それから3年もたつたためかこのうちに, ヒトラーの権力は盤石のものとなっていた。亡命社会民主党の『ドイツ通信』のある報告者は, 1935年3月の一般兵役義務の導入

平成20年2月27日 原稿受理
大阪産業大学 人間環境学部

によって「戦争への不安がいたるところで感じられる」としながらも、「ヒトラーの政治的才能と誠実な意欲への信頼はますます拡大している」と述べている¹⁾。

目を見張るようなヒトラーの権力確立を可能にしたさまざまな要因のなかで、ケルショーは「ヒトラー崇拜」(＝「ヒトラー神話」)に注目する。そして、これが民衆のあいだで大きな統合機能を発揮したこと、したがって、ナチ支配の存続のためには「ヒトラー崇拜」が不可欠であったことを強調している²⁾。

ドイツにおける「指導者崇拜」あるいは「指導者待望」は19世紀に遡るが、とくにワイマル共和国になってその傾向が強まった。なかでも第一次世界大戦の英雄ヒンデンブルクの人気はワイマル期を通じて非常に根強いものであった。

本稿では、この「ヒンデンブルク崇拜」がどのようにして「ヒトラー崇拜」にとって代わられていくのかを跡づけることによって、「ヒトラー崇拜」成立の一端を明らかにしたい。まず第Ⅰ章では、ワイマル期における「ヒンデンブルク崇拜」の様態を示し、第Ⅱ章および第Ⅲ章では、ヒトラーやナチ党が、「ヒトラー崇拜」を確立するためにいかに巧みに「ヒンデンブルク崇拜」を利用したのかを検討する。

I ワイマル期における「ヒンデンブルク崇拜」

ワイマル期における「ヒンデンブルク崇拜」について述べる前に、まずヒンデンブルクの簡単な略歴を示しておこう³⁾。

パウル・フォン・ヒンデンブルクは、1847年、代々軍人を輩出してきた東プロイセンのユンカーの家に生まれた。彼は、幼年学校を出てプロイセンの軍人となり、1911年に歩兵隊大将として退役したが、一般のドイツ人のあいだではまったく無名の軍人にすぎなかった。

ところが、1914年8月、第一次世界大戦が勃発し、ロシア軍が東プロイセンに侵入したため、ヒンデンブルクは急遽、東部第8軍司令官に任命され、参謀長のルーデンドルフとともにこれに対処することになった。そして、8月下旬のいわゆる「タンネンベルクの戦

1) *Deutschland-Berichte der Sopade*, Zweiter Jahrgang (1935), Frankfurt/M 1980, S.279.

2) イアン・ケルショー (柴田敬二訳) 『ヒトラー神話—第三帝国の虚像と実像』(刀水書房, 1993年)。

3) ヒンデンブルクの経歴については、彼の自伝があるし、ワイマル期以降、多数の伝記が書かれている。ここでは、以下を参照。Generalmarschall von Hindenburg, *Aus meinem Leben*, Leipzig 1920 (本稿で利用した版は1934年に出版されたもので、すでにそれまでに22万部以上売っていたことがわかる); Walter Görlitz, *Hindenburg. Ein Lebensbild*, Bonn 1953; Walter Rauscher, *Hindenburg. Feldmarschall und Reichspräsident*, Wien 1997.

い」におけるドイツ軍の勝利によって、一躍「国民的英雄」となったのである。その後、1916年には最高軍司令部の参謀総長に任命され、同時にルーデンドルフも第一幕僚長として最高軍司令部に入り、二人が敗戦まで戦争の指揮をとることになる。

1918年11月、ドイツ革命が起こって帝政は崩壊したが、ヒンデンブルクはその職に留まりつづけた。1919年6月にワイマルの国民議会がヴェルサイユ講和条約の受諾を可決した後、彼は最高軍司令部を辞し、ハノーファーに引っ込んだ。だが、1925年2月に共和国大統領エーベルトが死亡し、彼は再度、現役生活に引き戻されることになる。3月末に行われた大統領選挙では、過半数を獲得した候補者がいなかったため、再選挙が行われることになり、右派はヒンデンブルクに立候補を要請した⁴⁾。4月26日に行われた第二回投票で、77歳のヒンデンブルクが投票総数の48.3%を獲得し（社会民主党と中央党が押したヴィルヘルム・マルクスは45.3%）、共和国大統領となった。

1932年3月から4月にかけて行われた大統領選挙では、事実上ヒンデンブルクとヒトラーの一騎打ちとなった。第一回投票でヒンデンブルクは49.6%（ヒトラーは30.1%）と過半数にわずかに及ばず、第二回投票でようやく再選された（ヒンデンブルクは53%、ヒトラーは36.8%）。

すでに1930年3月のミュラー大連立内閣の倒壊以降、議会の過半数を占める諸政党が内閣を構成することは不可能となり、大統領による首相の指名が行われていた（いわゆる「大統領内閣」）。そして1933年1月30日、それまでヒトラーの首相任命を拒んでいたヒンデンブルクがついに折れてヒトラーを首相に指名し、ヒトラー内閣が誕生した⁵⁾。ヒンデンブルクはその後も大統領の職にあったが、1934年8月初め、86歳で死去した。

以上の簡単な経歴からもわかるように、「ヒンデンブルク崇拜」は「タンネンベルクの勝利」によるものであり、彼はこの直後から「タンネンベルクの救済者」、「国民的英雄」として絶大な人気を博するようになった。こうした彼の人気にはその堂々たる外観も寄与していたものと思われる。第二帝政期に首相を務めたフォン・ビュローは、回想録の中で

4) すでにドイツ革命後の国民議会選挙に際して、ドイツ国家国民党、ドイツ国民党など右派の3つの政党がヒンデンブルクに立候補を要請したが、彼はこれを拒否していた。Rauscher, *op.cit.*, S.193f. ラウシャーによれば、彼は大統領選挙への出馬を、彼の祖国への義務感に巧みに訴えた海軍提督ティルピッツの説得によって決意したという。Ibid., S.224-226.

5) 「大統領内閣」期におけるドイツの政治、とくに政治路線を右に移そうとする大統領の「取り巻き」たちの動き、そこにおけるヒンデンブルクの役割といった問題は、ワイマル共和国がなぜ崩壊したのかを考えるうえで非常に重要な問題であり、多数の研究がなされている。だが、本稿は彼の政治的行動や役割ではなく、その「イメージ」を扱っているので、この問題には触れない。

ヒンデンブルクについて以下のように述べている。

骨の髄までドイツ人である。外観においてもまたドイツ人である。広い肩、重々しくしっかりとした足取り、大きくて優しい眼、まったく飾り気のない態度。これらが、彼の本性に根ざし、そこから発する巧まざる品位と一緒に⁶⁾。

このように、「ドイツ国民の、とくにプロイセン軍の良き特質すべてを体現している」(ビュロー)ヒンデンブルクの人気は、ラウシャーによれば、彼が宮廷のお気に入りではなく、また野心家でもなかったために一層高まったという⁷⁾。その人気を利用して、1917年には、彼の顔だけを描いた戦債募集のポスターが作成された⁸⁾。

1917年10月2日、カトリック系の新聞はプロテスタントであるヒンデンブルクの誕生日について以下のように書いている。

この日がドイツ国民全体にとって真の国民的祝祭日であることは自明である。われわれが、個人的な違い、政治的信念の相違、戦争観・平和観の違い、その他われわれを分かち諸々の事がらを超えて、全員一致することがあるとすれば、それはすべてのドイツ人が「われわれのヒンデンブルク」に対して抱く深い尊敬の念である⁹⁾。

彼の人気は宗派・信条の違いを超えていたのである。多数の市町村が彼を名誉市民に認定し、多くの大学が名誉博士号を授与した。ヒンデンブルク人形のような「ヒンデンブルク・グッズ」がショーウィンドーを賑わし、ヒンデンブルクの名前を商標にするペンや葉巻、靴やネクタイなどが売り出され、さらにレストランの料理や、チョコレート、アイスクリームなどにも彼の名前がつけられたという¹⁰⁾。このような現象は外国にも知られており、イギリスのカリカチュアは「ヒンデンブルク・グッズ」(肖像画はもちろんのこと、ヒンデンブルク・ランプや花瓶、ビール・ジョッキ、クッションなど)に囲まれて暮らす

6) 以下より引用。Rauscher, *op.cit.*, S.49.

7) *Ibid.*, S.50.

8) Sabine Behrenbeck, "Der Führer". Die Einführung eines politischen Markenartikels, in: Gerald Diesener und Rainer Gries (Hg.), *Propaganda in Deutschland. Zur Geschichte der politischen Massenbeeinflussung im 20. Jahrhundert*, Darmstadt 1996, S.56.

9) 以下より引用。Wolfram Pyta, Paul von Hindenburg als charismatischer Führer der deutschen Nation, in: Frank Möller (Hg.), *Charismatischer Führer der deutschen Nation*, München 2004, S.125.

10) Rauscher, *op.cit.*, S.50-51.

ドイツ市民を風刺している（図1）。



図1 「ヒンデンブルク狂、あるいはプロイセン的室内装飾の極み」
（『ミスター・パンチの大戦争史』）¹¹⁾

「ヒンデンブルク崇拜」は、敗戦を経てワイマル期になっても衰えることはなかった。戦争後半は最高軍司令部で指揮を執っていたので、いわば敗戦の「責任者」であったが、その責任が問題にされることはなかった。むしろ、敗戦ゆえに、「タンネンベルクの勝利者」ヒンデンブルクの「業績」がいっそう際だつことになったと言えるのかもしれない。しかも、ヒンデンブルクはルーデンドルフとともに、国民議会の敗戦原因調査委員会でイギリスの将校の発言だとして「ドイツ軍は背後から刺された」との説を披露し、ドイツ国内で起こった革命のために敗北を余儀なくされたという「背後の一突き伝説」が一層流布するのを助長した¹²⁾。こうして、とりわけ右派にとっては、第一次世界大戦敗北の責任は第二帝政期の政治家や軍から革命後に政権を担った社会民主党（後にナチスは「11月の犯罪者」と罵倒することになる）に転嫁されたのである。

最高軍司令部を辞したあとヒンデンブルク夫妻が住むことになったハノーファー（1911年の退役後もここに住んでいたが、市は戦後、「名誉市民」ヒンデンブルクに新しい住居を寄贈した）での人気はとくに熱狂的なものであり、市民はよく「私たちのヒンデンプル

11) 図1の出典：ジョージ・L・モッセ『英霊一創られた世界大戦の記憶』（柏書房、2002年）、13頁。なお、モッセが「ヒンデンブルク狂、あるいはプロイセン的室内装飾の極み」と題されたこのカリカチュアを例にして言及しているのは、戦争体験の平凡化という現象（戦争に関わるものが日用品に使われ、大衆演劇や戦場観光旅行になること）である。モッセによれば、このような戦争体験の平凡化は、一般市民を戦争の現実慣れさせ、こうして戦争体験の神話を支えたという。「平凡化の過程」については、133～158頁を参照。

12) Rauscher, *op.cit.*, S.212f. なお、「背後の一突き伝説」については、以下を参照。成瀬治・山田欣吾・木村靖二編『世界歴史大系 ドイツ史3』（山川出版社、1997年）、138～139頁。

ク」と口にした。1919年7月3日にヒンデンプルク夫妻がハノーファーに到着した際、市を挙げての歓迎式典が大々的に行われた。市民たちは、かつての皇帝と同じようにできる限り厳かに迎えようと努力したという¹³⁾。1921年5月に死亡した妻ゲルトルトの葬儀の模様も、ハノーファーにおける強烈な「ヒンデンプルク崇拝」を示している。新聞記事によれば、5月18日の葬儀（午後2時半より）当日、すでに11時には墓地に向かう道路の交通渋滞が始まり、市電も超満員で、2時ごろになると墓地の周辺地域は、生命に危険だと思えるほどの混雑ぶりであった¹⁴⁾。

もちろん、このようなハノーファー市民の「ヒンデンプルク崇拝」を、ただちにドイツ全体の現象だと一般化することはできない。だが、1925年4月の共和国大統領選挙にヒンデンプルクが担ぎ出されて当選したことを考えれば、ハノーファー特有の現象として片づけることもできないように思われる。

1925年3月末に行われた大統領選挙では、各党が候補者をたてたために、どの候補者も過半数に達しなかった。第二回投票は4月末に行われることになったが、社会民主党が中央党の候補者マルクスを押しことに決定したので、第一位であった右派の候補者カール・ヤレスが敗北する可能性が出てきた。こうして、ヒンデンプルクに白羽の矢が立てられたのである。

ヒンデンプルクの選挙キャンペーンは、彼を支持する市民たちの熱狂ぶりを示している。合唱団、体操クラブ、射撃協会、プロテスタント教会の諸組織、主婦団体など市民層の多数の組織、また鉄兜団（退役軍人の武装組織）がキャンペーンに参加し、ビラを配り、多数の集会やパレードを組織した。ヒンデンプルクが姿を見せたハノーファーでの集会では、多数の「黒・白・赤」の旗が通りに飾られ¹⁵⁾、市民の家々にもこの旗がはためいた。この現象は他の多くの都市でも見られた。フリツェは、ヒンデンプルクを支持する草の根の精神に注目して、こうした事態を「戦後はじめて、小都市の市民たちが公的政治への情熱に捕らわれた」と評している¹⁶⁾。

13) Sabine Guckel und Volker Seitz, "Vergnügliche Vaterlandspflicht". Hindenburg-Kult am Zoo, in: Geschichtswerkstatt Hannover, *Alltag zwischen Hindenburg und Harrmann. Ein anderer Stadtführer durch das Hannover der 20er Jahre*, Hamburg 1987, S.13-14.

14) Ibid., S.16-17.

15) ワイマル共和国期には、「黒・赤・金」の三色旗が国旗と憲法で定められたが、右派は帝政期の国旗である「黒・白・赤」旗に固執し、この旗は彼らの政治的心情を示すシンボルになっていた。国旗の問題については、以下を参照。成瀬・山田・木村編、前掲書、130～131頁。

16) Peter Fritzsche, Presidential Victory and Popular Festivity in Weimar Germany: Hindenburg's 1925 Election, in: *Central European Hisotry* 20 (1990), p.212.

選挙の翌日にもドイツ中の多くの町では、ヒンデンブルクの支持者たちがその勝利を確信して通りに繰り出し、パレードや集会が行われ、再び市民の家々には「黒・白・赤」の旗が掲げられた。たとえば、人口約2万5000人の小都市ゴスラーでは、鉄兜団と体操連盟に組織された祝賀パレードが行われ、多数の市民が中世の町並みを残す狭い街路を練り歩いたという¹⁷⁾。1927年10月2日のヒンデンブルク80歳の誕生日にも、1925年の大統領選挙キャンペーンに匹敵するような多数の市民団体の自発的イニシアティブが発揮され、多くの町で華々しい祝典が行われた¹⁸⁾。このような現象を可能にした重要な要因の一つに、「ヒンデンブルク崇拜」があったことは言うまでもない。

もちろん、「ヒンデンブルク崇拜」は主として市民層のあいだの現象であって、社会民主党や共産党（いうまでもなく、両党にとって君主主義者のヒンデンブルクは「反革命のシンボル」であった）を支持する労働者層がヒンデンブルクに熱狂したわけではない。「ヒンデンブルク崇拜」において群を抜いていたとされるハノーファーでも、組織化された労働者がヒンデンブルクをどのように捉えていたのかは不明である¹⁹⁾。前述したヒンデンブルクの誕生日の祝典にも、社会民主党系および共産党系の退役軍人団体や合唱団、体操クラブなどは参加しなかったと言われる²⁰⁾。

ワイマル共和国期の社会は、階級間あるいはミリュー間の深い分裂を特徴としていたが、このような分裂は大統領選挙の結果にも明確に示されている。1925年4月の選挙でヒンデ

17) Ibid., p.214.

18) Ibid., pp. 217-218. フリッチェによれば、このときの祝祭の規模と拡がりには、1930年代以降のナチ党による大規模な祝祭と比べれば見劣りがするためにこれまで注目されてこなかったが、すでに20年代半ばから市民が積極的に街頭に出るようになっており、後のナチ党による大規模な動員に向けた変化が始まっていたという。

19) Guckel/Seitz, op.cit., S.16.

20) Fritzsche, op.cit., S.217. 社会心理学者のエーリヒ・フロムが、1929年から1931年にかけて、ドイツの労働者およびホワイト・カラー584人に対して行った調査がある。「歴史上、あるいは現在において、誰が最も偉大な人物だと思いますか」という質問項目について、同時代のドイツ人で最も多くの人々が挙げた名前はシュトレゼマン（42名）、次いでヒンデンブルク（40名）であった。ただ、支持政党ごとに（「社会民主主義者」、「左派社会主義者」、「共産主義者」、「ナチス」、「ブルジョワ政党」、「非投票者」の6分類）どれくらいの人々がその名前を挙げたかを分類した表によれば、シュトレゼマンは、「左派社会主義者」、「共産主義者」、「ナチス」には挙げた人がいなかったのに対して、ヒンデンブルクはすべての分類で名前が挙げられている（「左派社会主義者」、「共産主義者」はそれぞれ2%、1%と非常にわずかだとしても）。以下を参照。Erich Fromm, *Arbeiter und Angestellte am Vorabend des Dritten Reiches. Eine sozialpsychologische Untersuchung*, Stuttgart 1980, S. 133-141 (表は、S.138).

ンブルクが獲得したのは、投票総数の48.3%で過半数に満たず、もし共産党が独自の候補者をたてなければ、共和主義勢力の社会民主党と中央党が押したマルクスに敗北していた可能性がある。ポイカートが指摘するように、政治的に見れば、共和主義勢力と権威主義的・復古的勢力が拮抗していたからである²¹⁾。だが、ヒンデンプルクはたしかに、「私は君主主義的世界の出身であることを否認しない」²²⁾として君主主義者であることを隠さなかったが、そのことを前面に押し出して選挙を戦ったわけではなかった。それに代わって彼が強調したのは超党派性であった。「大統領は国民のあらゆる身分に奉仕しなければならず、何らかの階級の闘争思考の代表者であってはならない」²³⁾というのである。

政治的、社会的に深刻な分裂を抱え、しかも敗戦から革命、ハイパー・インフレーションと政治的経済的に激しい混乱を経験したドイツでは、このような分裂や混乱を強い力で克服してくれる指導者への期待、また階級対立を超えるフォルクスゲマインシャフト（国民共同体、民族共同体）への希求が非常に強かったと言われる²⁴⁾。ヒンデンプルクは特定の階級の立場を代表するのではなく、すべての階級（身分）を和解させ、一致させる力であることを強調し、こうして内的統一を望む多くのドイツ国民の憧れに応えようとした。したがって、ヒンデンプルクに投票した人びとの多くは、「君主主義者」ヒンデンプルクよりもむしろ、秩序や法や道徳を重んじ、「国民すべての奉仕者」を自任する人物に期待を寄せたのである。共和国大統領になったヒンデンプルクは、その就任演説においても、「わが国民のあらゆる労働能力・建設的能力を超党派的にまとめ上げるべく尽力する」ことを強調した²⁵⁾。これ以降、大統領としては当然とも言えるが、「タンネンベルクの勝利者」や「軍事的英雄」よりも、「国民の父」というヒンデンプルク像が前面に出るようになった。

II 対決から「和解」へ

1932年3月から4月にかけて行われた大統領選挙は、現職の大統領ヒンデンプルクとナ

21) デートレフ・ポイカート（小野清美・田村栄子・原田一美訳）『ワイマル共和国—古典的近代の危機』（名古屋大学出版会、1993年）、182頁。

22) Rauscher, *op.cit.*, S.230. なお、このようなヒンデンプルクの共和国大統領への立候補、そして当選が諸外国に引き起こした反応については、以下を参照。Görlitz, *op.cit.*, S.258-260.

23) Rauscher, *op.cit.*, S.230.

24) ワイマル期における「指導者待望」については、以下を参照。Thomas Mergel, *Führer, Volksgemeinschaft und Maschine. Politische Erwartungsstrukturen in der Weimarer Republik und dem Nationalsozialismus 1918-1936*, in: Wolfgang Hartwig (Hg.), *Politische Kulturgeschichte der Zwischenkriegszeit 1918-1939*, Göttingen 2005, S.91-127.

25) 実際、憲法を厳格に遵守しようとするヒンデンプルクの態度は、君主主義者を怒らせ、離反させたという。Rauscher, *op.cit.*, S.237.

キリスト教党首ヒトラーとの対決となった。前回25年の大統領選挙から7年のあいだに、ドイツの経済・政治状況は大きく変化していた。まず、その変化について簡単に触れておこう。

1929年秋、アメリカにおける株価大暴落で始まった世界経済恐慌は、またたく間に世界中に波及し、アメリカからの借款によって落ち着きを取り戻していたドイツ経済にも深刻な影響を及ぼした。企業の倒産や金融危機が相次ぎ、大量の失業者が巷に溢れた。後から振り返れば、32年が景気のどん底だったと言われているが、当時の人びとにはそのことがわかるはずもなく、彼らは、将来に対する大きな不安を抱えて生活していた。

こうした経済的混乱、人びとの将来への不安は政治にも大きな影響を及ぼし、ワイマル共和国の議会政治は機能不全とも言えるような状況に陥っていく。1930年3月に社会民主党のミュラーを首班とする大連立内閣が崩壊して以降、議会の過半数に基盤をおく内閣の形成が不可能になり、大統領が首相を指名するいわゆる「大統領内閣」が続いた。30年9月の国会選挙におけるナチ党の大躍進（議会第二党に）もまた政治的混乱に拍車をかけた。このことによって右派の勢力図が大きく変化し、前回選挙ではヒンデンプルクの対立候補を推していた政党が今回は彼を推薦するという大転換が生じた。

第I章で触れたように、1925年の大統領選挙は、少なくとも政党レベルでは共和主義勢力対権威主義的・復古的勢力という図式で戦われた。ところが、32年の選挙では、ナチ党の伸長に危機感を抱いた社会民主党が「より小さな悪」を選択して、ヒンデンプルクを支持する側に回ったのである²⁶⁾。それでもヒンデンプルクは、第一回投票では49.6%しか獲得できず、ようやく第二回投票で53%を獲得して再選された。第一回から第二回投票への伸び率はヒトラーの方が大きかった（30.1%から36.8%へ）。

この選挙においてヒンデンプルクが強調したのは、前回選挙と同様、超党派性であった。彼は、1932年3月10日のラジオ演説で以下のように述べている。

私が真剣な熟慮の後に再度立候補を決意したのは、それによって祖国への義務を果たすという感情に駆られてのことであった。私が立候補しなければ、諸政党の激しい分裂、とりわけ右派の不統一という状況にあって、第二回目の投票で、急進的右派の候補者か急進的左派の候補者が大統領に選出される危険があった。一面的で極端な政治観の代表者である政党人が選出されれば、われわれの祖国は見通しがたい深刻な危機に陥るだろ

26) ヒンデンプルクを支持したのは、社会民主党などいわゆる「ワイマル連合」の諸政党とドイツ国民党である。したがって、32年の選挙では、「君主主義者」ヒンデンプルクが共和主義勢力を代表することになったのである。これらの勢力がヒンデンプルクを支持することになる経緯については、以下を参照。Görlitz, *op.cit.*, S.353-358.

う。それを阻止するのは私の義務である。(…) 私が左派あるいは黒赤連合 [中央党と社会民主党一筆者] の勧めで立候補したと主張されているが、それは誤りである。ドイツ国民のあらゆる階層、あらゆる集団が立候補するように申し出たのである。(…) 私自身、ドイツ全体の広範な階層が大統領職に留まることを希望していると確信して、立候補に同意した²⁷⁾。

このように、自らの超党派性を重視するヒンデンブルクはまた、「1914年の精神」に言及して、ナショナルで愛国的なドイツの一体化への希望を放棄しないよう訴えている²⁸⁾。

ヒンデンブルク支持者の期待もこれに沿ったものであった。作家のハウプトマン、画家のリーバーマンといった芸術家たちもヒンデンブルクを支持するアピールを出しているが、その中で、彼は、「政党精神の克服」^{フオルク}、「国民共同体の象徴」、「自由への導き手」(ヒトラーや共産党の候補者テールマンを意識してのことであろう) という言葉で表象されている²⁹⁾。社会民主党のオットー・ブラウンは、ヒンデンブルクを「平穏と不変性、信頼性、国民全体のための献身的な義務遂行の権化」として描き出した。当時の首相ブリューニングも熱心に選挙キャンペーンを行い、ヒンデンブルクは「真の指導者」、「神に遣わされた男」、「ドイツの力と一体性のシンボル」であると称揚している³⁰⁾。たしかに、これらの言葉は選挙用のアピールにすぎないが、ヒンデンブルク自身の言葉とこれらの表象を合わせて考えれば、当時彼を支持した人びとのヒンデンブルク・イメージあるいは彼に何が期待されたのかが明らかになる。それは、党派間の分裂が激しいドイツを、「1914年の精神」あるいは「国民共同体の精神」で一つにまとめ上げることであった。これに対して、ヒトラーは「変化」や「刷新」をアピールしていく。

1932年の大統領選挙におけるナチ党の選挙キャンペーンが非常に人目をひく斬新なものであったことはよく知られている。ヒトラーは二回目の投票に向けてはじめて飛行機をチャーターし、6日間に20の都市で大規模な集会を開いた³¹⁾。この「ドイツ飛行」の狙いは、ヒトラーに「若々しく、ダイナミックな人物」というイメージを与えて、すでに高齢のヒンデンブルクとの違いを際立たせることにもあった。ナチ党にとって、ヒンデンブルクは

27) Rauscher, *op.cit.*, S.281-282.

28) 「1914年の精神」とは、第一次世界大戦の勃発によって一時的にもたらされた国民的一体感のことを指す。彼はまた「人間を問題にして、身分や政党を問題にしない前線精神」とも言っている。*Ibid.*, S.282.

29) *Ibid.*, S. 279.

30) *Ibid.*, S.280-281.

31) ケルショー、前掲書、42頁。

「毫碌して寄る辺のない老人」³²⁾にすぎなかった。また、「ヒトラーへの票は変化の票、ヒンデンブルクへの票は現状維持の票」³³⁾というスローガンを掲げて、経済的政治的混乱から抜け出すことを望む多くの人びとに訴えかけた。このように、ナチ党は、「平穩」や「秩序」、「一体性」（＝分裂の克服）といったイメージをもつヒンデンブルクを意識してか、ナチ党の重要な主張である「民族共同体の樹立」^{フォルク}よりもむしろ、「若さ」や「変化」、「ダイナミズム」を前面に押し出したのである。

大統領選挙でヒンデンブルクとの違い、対決姿勢を打ち出したヒトラーは、翌1933年1月末に、「毫碌した老人」によって首相に任命された。直ちに国会が解散され、3月5日に選挙が行われることになったが、ヒトラーは一転してヒンデンブルクとの「同盟」を強調することになる。

国会選挙に向けて、ヒトラーの首相就任は「世界史的事件」であると宣伝され、ヒトラーは「共産主義に対する最後の砦」、「農民と労働者の最後の希望」、「キリスト教の保護者」であるとのイメージが振りまかれた³⁴⁾。しかもナチ党は、ワイマル末期にはあれほどヒンデンブルクを非難していたにもかかわらず³⁵⁾、一転して彼を「国民的英雄」と持ち上げ、ヒトラーと並ぶヒンデンブルクを描いた選挙ポスターが作成された。一つのポスターでは、「元帥と一等兵がわれわれと共に平和と同権のために戦う」という言葉が添えられている（図2）³⁶⁾。また、もう一つのポスターでは、黒地に二人の顔が浮かび上がるような構図をとっている（図3）³⁷⁾。

ヒトラーは一方で「革命」や「刷新」、「変化」を強調しながら、他方では、「平穩」や「秩序」といったヒンデンブルクのイメージを利用して、ヒトラーに不安を抱く人びとをなだめようとしている。この時点では、ヒトラーにはまだ「毫碌した老人」の権威が必要だったのである。

だが、ヒンデンブルクの権威の借用や激しい選挙キャンペーン、共産党・社会民主党へ

32) Rauscher, *op.cit.*, S.281.

33) ケルショー、前掲書、42頁。

34) 同上書、53頁。

35) たとえば、ゲッベルスは、ヒンデンブルクが中央党と社会民主党の味方になったと非難し、マルクス主義者やイエズス会の、意志をもたない道具だと罵倒している。Rauscher, *op.cit.*, S.280.

36) 図2の出典：Behrenbeck, *op.cit.*, S.60. ベーレンベックが注で指摘しているように、「元帥と一等兵」として第一次世界大戦における彼らの業績を想起させながら、ヒンデンブルクは平服を着ており、ヒトラーは党の制服である。Ibid., S.76, Anm.41.

37) 図3の出典：Paul Lindenberg (Hg.), *Hindenburg-Denkmal für das deutsche Volk*, Berlin o. J., S.8.



図2 国会選挙用ポスター・1



図3 国会選挙用ポスター・2

の選挙妨害，厳しい弾圧にもかかわらず，ナチ党は過半数を獲得することはできなかった（43.9%）。ナチ党単独での統治を望むヒトラーには，さらなる演出が必要であった。そのために行われたのが，3月21日のポツダム衛戍教会での国会開会式である。3月21日はかつてビスマルクがドイツ統一後はじめて帝国議会を召集した日であり，ポツダム衛戍教会にはフリードリヒ大王の墓所があった。こうして，ヒトラーはプロイセン・ドイツの伝統と自らが体現する新しいドイツとの融合をはかろうとしたのである。

プロイセンの軍服を着用したヒンデンプルクに対して恭しく頭を下げる礼服のヒトラー（図4）³⁸⁾。新聞にでかでかと掲載され，ニュース映画で流されたこの写真（映像）に込め



図4 1933年3月21日「ポツダムの日」

38) 図4の出典：Ibid., S.472.

られたヒトラーの意図は明白であった。「国民の父」に敬意を払う「国民の息子」、あるいは「新しいドイツ」を祝福する「古い権威」。そして二人の握手は、二人の「和解」だけではなく、この二つのイメージの融合を象徴するものであった。実際に、ヒンデンプルクは開会の辞のなかで、その場所の重要な意味に触れ、古いプロイセンを想起するよう促しているし、その後で挨拶に立ったヒトラーも、古くて偉大なるものの象徴と若い力のシボルのあいだで数週間のうちに醸成された国民的な尊敬について語っている³⁹⁾。

その後、ヒンデンプルクが公の場に姿を現すことは少なくなったが、相互の尊敬が強調され、二人一緒の写真もいくつか撮られている⁴⁰⁾。まだまだヒトラーやナチ党にとっては、ヒンデンプルクの権威が必要だったのであろう。1933年11月12日に、国際連盟からの脱退の是非を問い、同時に国会議員リストへの賛否も問う国民投票が実施されたが、ヒンデンプルクはそれに向けて、ラジオ演説を行った。彼は、「私と政府は、戦後の分裂状態と無力からドイツを抜け出させるという意志において一致している」と述べて、ヒトラーの政治方針への賛同を明確に表明し、彼およびヒトラーとともに（諸国家の）同権という原則と世界の平和をはっきりと支持するように訴えている⁴¹⁾。

以上のように、ヒトラーやナチ党は政権掌握後、権力の確立をはかるためにヒンデンプルクの権威やそのイメージを徹底的に利用しようとした。そして、その総仕上げと言えるものが、ヒンデンプルクの葬儀であった。

Ⅲ 「後継者」に

1934年8月2日午前9時25分、ドイツではすべてのラジオ放送がストップし、国民啓蒙宣伝相ゲッベルスによってヒンデンプルクがその日の朝に死去したことが告げられた。放送停止のまま30分が過ぎ、再びゲッベルスによってヒンデンプルクの死去に伴う当面の法的な措置が告示された。「ドイツ帝国国家元首に関する法律」——ヒトラーが大統領職を兼任する——、「ヒンデンプルク元帥の国葬のための法律」——国葬を行い、その実施は担当大臣に委ねる（その後、国葬は8月7日にタンネンベルク記念碑で行うことが決定された）——、政府の「服喪令」——以後14日間、ドイツ国民全体は喪に服すること——な

39) Rauscher, *op.cit.*, S.314.

40) たとえば、ベルリン・ルストガルテンでの集会に向かう車中の二人、馬車に並んで座り談笑しているように見える二人など。後者の写真には、「二人には話すことがたくさんある」というキャプションがつけられている。Lindenberg (Hg.), *op.cit.*, S.7 und S.488.

41) Rauscher, *op.cit.*, S.318. 国民投票の結果は、外交政策に関しては賛成が95.1%, 国会議員リストへの賛成が92.2%であった。

どである（『ヒンデンブルク追悼・記念集』、10～11頁）⁴²⁾。そして、すでにこの日からドイツ全国で追悼集会や追悼礼拝が計画・実施され、翌日の新聞には、ドイツ中から寄せられた弔辞が掲載され、「ブランデンブルク門前」という場所が「ヒンデンブルク広場」へと改称された（22頁）。

党や国家の指導者たちがそれぞれアピールやメンバーへの指令を出している。ナチ党指導者代理のルドルフ・ヘスはナチ党員に向けて、親衛隊全国指導者ヒムラーは親衛隊員に向けて、内相フリックは警察全体に向けて、といった具合である。具体的な行動を求める指令もあった。たとえば、労働奉仕団団長ヒエールは、すべての宿泊所あるいは仕事場で追悼集会を行うよう命じ（27頁）、ヒトラー・ユーゲント全国指導者シーラッハは、すべての団員に、それぞれの村や町の戦士記念碑に花や花輪を手向けて、ヒンデンブルク元帥に敬意と感謝の念を捧げるようにとの指令を出した（26頁）。また、教育相ルストは、諸州の学校管理局に以下のような通達を出した。国会で追悼式典が行われる8月6日には、授業を12時で終えて生徒を一カ所に集め、ラジオで放送されることになっている追悼式典を聞かせること、葬儀当日の7日には、授業を休講にして各学校で追悼集会を開き、葬儀の放送を聞かせること、と（25頁）。

8月6日の国会追悼式典と7日の国葬に際して行われた追悼演説の中で、ヒトラーは「世界史最大の戦い」として「タンネンベルクの戦い」の意義を強調した。そして、「ドイツに降りかかった世界戦争」、「罪もないのに攻撃される」、「抵抗に立ち上がる」といった言葉に示されているように、「防衛戦争」としての第一次世界大戦像を前面に押し出している。また、ヒンデンブルクのおかげで、「ドイツの最良の過去とより良き未来との融和」が可能になったとして彼の功績を称え、「ナチ運動の、そして同時にわが民族の後援者」、「つねに再生されていく、わが民族の不滅の生命力を象徴する人物」としてヒンデンブルクを礼賛している（34～37頁、44～46頁）。

それでは次に、ナチ党がヒンデンブルクの葬儀をどのように利用しようとしたのか、また、彼のどのようなイメージを喚起しようとしたのかという問題について考えてみたい。ヒンデンブルクの死去から国葬にいたるまでのさまざまな催し、ナチ党幹部の弔辞や党組織などへの呼びかけ、そしてヒトラーの追悼演説などから、以下の3点を指摘することができる。

42) ヒンデンブルクの死後に出版された『追悼・記念集』には、死の直前の様子から、葬儀にいたるまでのさまざまな指令、各界の人びとの弔辞、ナチ党諸組織や各大臣の指令、葬儀の模様、さらに各国からの弔辞、ヒンデンブルクの「遺言」が掲載されている。以下の叙述は、基本的にはこの文献に依拠しており、本文中に記す頁数はこの文献のものである。
Hindenburg, Ein Ehren=und Gedenkbuch für das deutsche Volk, Berlin o. J. (1934?)

まず第一に言えることは、「ドイツ国大統領ヒンデンブルク」よりも、「軍事的英雄」、「祖国の救済者」という側面が前面に出されているということである。これは、タンネンベルク記念碑が葬儀場に選ばれたことにも明確に示されている。すでに第一次世界大戦後から、「タンネンベルクの戦い」を記念するための碑を建てるのが計画され、毎年、戦場近くの町で記念祭が挙行されていたが、ようやく10周年にあたる1924年8月に、記念碑建立のための定礎式が行われた。そして、27年9月には、大統領になっていたヒンデンブルクも出席して大々的に落成式が挙行された。当時の新聞によれば、8万人もの人びとが詰めかけたと言われている⁴³⁾。このように、タンネンベルク記念碑は、まさにヒンデンブルクの「軍事的栄光」を称揚する場だったのである⁴⁴⁾。

もちろん、ナチ党幹部たちが、ヒンデンブルクのさまざまなイメージのうち自分たちに都合の良い面を恣意的に強調したことは言うまでもない。たとえば、彼を「大地に根ざし、農民層に結びついていると感じていた数少ない将軍」（26頁）として強引に農民に引きつけた農本主義者のダレー（全国農民指導者）のアピールはその典型であろう⁴⁵⁾。しかし、それでも、全体的に見れば、「軍事的業績」を称える言葉が目立っている。ナチ・ドイツ戦士同盟（旧鉄兜団、ヒンデンブルクはこの組織の名誉会員であった）のフランツ・ゼルテはもちろんのこと、ナチ党のルドルフ・ヘスも、「彼は栄光に満ちたドイツ史のシンボルとしてわれわれの心の中に生き続ける。タンネンベルクの勝利者として生き続ける。第一次世界大戦の元帥として生き続ける。偉大な国民の父として生き続ける」（22頁）というように、「戦争における栄光」を強調している。

すでに追悼演説のところでも触れたように、この点ではヒトラーも、またゲッベルスも同様である。ゲッベルスは、「ドイツ国民に対する政府表明」において、「外国軍の侵入・殺到から東プロイセンを救済したことによってはじめて、彼は祖国の父になった」（15頁）として、「戦争における祖国の救済者」の側面を強調した。1933年3月21日の「ポツダムの日」におけるヒンデンブルクはたしかにプロイセン軍の軍服を着用していたが、彼がその際表象していたのは、「タンネンベルクの勝利者」というよりもむしろ、「古き良きプロ

43) Heike Fischer, Tannenberg-Denkmal und Hindenburgkult. Hintergründe eines Mythos, in: Michael Hutt/Hans-Joachim Kunst/Florian Matzner/Ingeborg Pabst (Hg.), *Unglücklich das Land, das Helden nötig hat*, Marburg 1990, S.29-32.

44) もちろん、この記念碑は、他の多数の戦没者記念碑と同じように、「ドイツ人の勇気と死への覚悟を示すメタファー」としての機能ももっていた。Ibid., S.32.

45) ダレーはこれに続けて、以下のように述べている。「われわれの悲しみはきわめて大きい、彼がこよなく愛した故郷の大地を神聖なものに保つことによって彼の思い出を守って、こうという意志にも満たされている」。Hindenburg. Ein Ehren- und Gedenkbuch, S.26.

イセンの伝統」であった。それが、この葬儀に際して、「軍事的英雄」の面がより強調されるようになったのである。このようなヒンデンブルク・イメージの変化の背景には、ヒトラーの権力基盤の確立があった。34年6月末から7月初めのいわゆる「レーム事件」によって、ヒトラーは党内の反対派を粛清し、同時に前首相シュライヒャーなどの保守的エリートも排除して、ドイツにおける支配権力を盤石なものにしていた。したがって、ヒンデンブルクの「軍事的英雄」イメージの強調によって、将来の戦争に向けての心理的準備を行うことがすでに意識されていたのかもしれない。

第二に、「軍事的英雄」像強調の裏面とも言えるが、ヒンデンブルクが大統領として果たした政治的業績には、一点を除いてまったく触れられていない。その唯一の業績とは、大統領としてヒトラーを首相に任命したことである。これによって、すでに「ポツダムの日」に大々的に提示されたように、「古いドイツ」と「新しいドイツ」の融合が可能になったというのである。ゲッベルスによれば、「彼において、…昨日のドイツと明日のドイツのあいだの完全な和解が体现されてい」た（16頁）。ヒトラーは、「最良のドイツの過去と、熱望されたドイツのより良き未来との融和が彼の名の下で達成された」（36頁）と表現している。

第三に明確なのは、ヒトラーがヒンデンブルクの後継者として打ち出されていることである。もちろん、法的にはすでにヒトラーが大統領職を兼任することになったのであるから、自明のことではあった。だが、ナチ党は、この葬儀の演出や一連の呼びかけにおいて、このことをドイツ国民に心理的に納得させようとしているのである。内相フリックは、ドイツの警察全体に「ドイツの真の男子は亡くなった。だが、ドイツは生きねばならない！したがって、アドルフ・ヒトラーとともに前進を！」（26頁）と呼びかけた。ヘスは、ナチ運動全体に対して、「ドイツにとってヒンデンブルクの生きた遺産は総統である。ヒンデンブルクへの忠誠は総統への忠誠を意味し、ドイツへの忠誠を意味する」（23頁）と述べて、ヒンデンブルクからヒトラーへの継承を強調している。

ヒトラー自身もこのことを明確に意識していた。彼は、ヒンデンブルクの1911年の退役に触れて、「他の何万人の人びとと同じようにつねにその義務を果たして祖国に奉仕し、それにもかかわらず無名のまま忘れ去られた名もなき将校」(35頁)と延べている。つまり、このような「名もなき将校」から一躍「祖国の救済者」へとのはりつめたヒンデンブルクに、やはり「名もなき一兵卒」からドイツの指導者になった自らを重ね合わせて、継承を示唆しているのである。

「ヒンデンブルクからヒトラー」へという路線をさらに強化することになったのは、葬儀から8日後に公表されたヒンデンブルクの「遺言」である。すでに5月11日に作成され

たことになっている「遺言」の最後には、以下のように記されていた。

私は、晩年に〔ドイツが一筆者、以下同〕再び強くなるのを目にできて神に感謝している。(…)私の首相アドルフ・ヒトラーとその運動は、ドイツ国民をあらゆる身分的階級的相違を超えて一致団結させるという偉大な目標に向けて、決定的に踏み出した。まだこれから多くのことがなされねばならないことはわかっている。国民的高揚〔政権掌握後にナチ党が掲げたスローガン〕と民族的結集という行為の背後に、祖国ドイツの融和が存在することを心から願っている。(65頁)

成立の経緯が複雑なこの「遺書」⁴⁶⁾においても、「私の首相」という表現によって、「国民の父」(ヒンデンプルク)から「国民の息子」(ヒトラー)への継承が表されている。

以上のように、ヒトラーたちは、ヒンデンプルクの「軍事的栄光」を想起させる場所において彼の国葬を大々的に演出し、「タンネンベルクの勝利者」、「祖国の救済者」という彼のイメージを改めて強烈に喚起した。こうして、ドイツ国民がヒンデンプルクにならって将来、「祖国への義務」を果たす気持ちになるよう⁴⁷⁾心理的に準備しようとしたのである。また、「ヒンデンプルクの後継者ヒトラー」というイメージも随所で持ち出され、ヒンデンプルクからヒトラーへの継承が心理的にスムーズに進むよう工夫が凝らされていた。

ところで、ヒトラー(=総統)を「政治的ブランド品」として売り出したナチ党の宣伝戦略に注目するベーレンベックは、政権掌握当初はまだヒンデンプルクのようなより古い権威が必要であったが、まもなく権威の借用は不必要になったと主張している⁴⁸⁾。たしかに、「総統神話」、「ヒトラー崇拜」はさまざまなメディアを通して確立されていく⁴⁹⁾が、「ヒンデンプルク崇拜」がまったく無用のものになったわけではなかった。

ヒンデンプルクの国葬後、タンネンベルク記念碑の一角(8つの塔のうちのひとつ)が

46) 「遺書」の成立経緯については、以下を参照。Pyta, op.cit., S.145-147.

47) この点も、ナチ党幹部たちの多数のアピールで強調されている。たとえば、突撃隊幕僚長ルツェのアピールや親衛隊全国指導者ヒムラーのアピールなど。Hindenburg. *Ein Ehren=und Gedenkbuch*, S.12.

48) Behrenbeck, op.cit., p.61. ベーレンベックによれば、ヒンデンプルクの死後、「帝国大統領兼帝国首相」となったヒトラーは、このような職名に代わって「総統(Der Führer)」(Führerは指導者という意味であり、ナチ党内にもさまざまな〇〇指導者がいたが、ヒトラーは定冠詞つきで呼ばれた)という呼称を用いるようになったが、これは多数の職務の累積を隠す役割も果たしたという。Ibid., p.64.

49) たとえば以下を参照。田野大輔『魅惑する帝国—政治の美学化とナチズム』(名古屋大学出版会, 2007年), 「第5章 親密さの専制」(215~251頁)。

「ヒンデンプルク墓堂」へと改装され、その中の「栄光の間」には元帥の制服を着用した巨大なヒンデンプルク像が設置された。ヒンデンプルクの遺体は、彼の誕生日にあたる1935年10月2日に新しい墓に埋葬され、ヒトラーはこの記念碑を「国民の聖殿」として「帝国記念碑」へと格上げした⁵⁰⁾。ここに込められたメッセージは明白であろう。国葬の際に前面に押し出された「祖国の救済者」というヒンデンプルク像がいわば永続化され、彼の墓所は、地理的にドイツと切り離された東プロイセンの地で、「ドイツの土地、ドイツの本質、ドイツの文化を維持するための永遠の戦い」⁵¹⁾を象徴するものとなったのである。第三帝国における「ヒンデンプルク崇拜」を示すもう一つの例を挙げておこう。それは、『ドイツの偉大な指導者—ビスマルク、ヒンデンプルク、ヒトラーとその業績』という小冊子である⁵²⁾。これは、「ドイツの年中行事」というシリーズの第2巻で、他に『死は終わりではない』、『夏至（冬至）祭の火のもとで』、『旗をはためかそう』といった題名のものが出されている⁵³⁾。内容は、儀式や祝典などの催しを演出する際に利用することを前提に構成されており、巻末には、このシリーズのそれぞれの巻に対応した楽譜つきの歌集も同時に出版されていることが記されている。

『ドイツの偉大な指導者』の叙述は、3人の人物についてそれぞれまったく同じ構成をとっている。まず、当人の短い言葉がいくつか挙げられ、次いで、他者によるその人物についての言葉、そしてその人物を題材にしたいくつかの詩、最後にシュプレヒコールや寸劇が掲載されている。掲載されたそれぞれの言葉や詩、シュプレヒコールなどにはナチスのメッセージが込められている。たとえば、「ヒンデンプルクという言葉」として一番最初に挙げられているのは、「われわれは、剣を手にしていようが、ハンマーとこてを手にしていようが、全員労働者である」(27頁)という短い文章である⁵⁴⁾が、この言葉は、「階級対立なき民族共同体」に労働者を統合しようとしたナチスの理念（プロパガンダ）に沿ったものである。また、1918年のカッセル労兵評議会員の言葉として、「彼[ヒンデンプルク]は、その軍隊を栄光ある勝利へと導き、困難なときにあってもその国民を見捨てなかった」(29頁)と記されている。この言葉は、ヒンデンプルクの名を借りて、その後継者であるヒトラーへの期待を示したものであると考えるのは読み込みすぎであろうか。

50) Fischer, op.cit., S.43-45

51) 当時のドイツ人の言葉。以下より引用。Ibid., S.45.

52) *Deutschlands große Führer. Bismarck, Hindenburg, Hitler und ihr Werk*, zusammengestellt von Felix Albrecht, Berlin o. J.

53) 上記の小冊子の巻末広告を参照。

54) 「1896年8月1日の挨拶」とあるが、どこで、どのような集団を相手に行ったものかは記されていない。

シュプレヒコールはタンネンベルクを題材にしている。ロシア軍の侵入から逃れてきた東プロイセンの農民、農婦、子どもたちとドイツの兵士が登場して、苦境から救ってくれる救済者を待ちかまえるという内容である。その一部を紹介してみよう。

子どもたち（小さな声で）：お母さん、家に帰りたい！

女性たち：救済者はどこに？この苦しみはいつ終わるの？

兵士（確信して）：苦しみは終わる。救済者はやってくる。

兵士全員：救済者は近くにいる。（…）

兵士：タンネンベルクの上に勝利の星がのぼっていく。光り輝く大きな星が。

兵士全員：星だ、星だ。救済者が近づいている。

男性と女性（全員で）：主に感謝を！

兵士：ヒンデンプルクだ。彼がお前たちを自由にしてくれる。

兵士全員：ヒンデンプルクがわれわれを導いてくれる！（37-39頁）

このようなシュプレヒコールが、実際にどれくらい利用されたのかは残念ながらわからない。だが、ヒトラーが「ヒトラー崇拝」（ヒトラー神話）を創り出す際に、「ヒンデンプルク崇拝」を巧みに利用していたことは明らかであろう。ベーレンベックは、「総統」こそ第三帝国における唯一の戦士・英雄であり、他の英雄の存在を許さなかったという⁵⁵⁾。ただし、この主張には「生存する」という限定をつける必要があるだろう。ヒンデンプルクの死後、彼を「タンネンベルクの勝利者」、「祖国の救済者」として崇拝・称揚することは、結局はその「後継者」であるヒトラーの崇拝・称揚へとつながったのである。

おわりに

ヒンデンプルクはタンネンベルクの勝利によって、無名の将校から一躍、国民的軍事的英雄として、国民の期待を一身に集めるようになった。だが、経済的危機と政治的混乱に彩られたワイマル共和国においては、とくに大統領に就任してからは、「軍事的英雄」としてよりも、平穏や秩序、分裂した国民の統合をもたらしてくれる「国民の父」として人気を集めた。このような人物が、経済的・政治的危機が頂点に達したワイマル末期に、ヒトラーを首相に任命したのである。そのうえ、ナチ党は、政権を掌握するや、ヒンデンプルクが全面的にヒトラーに信頼を寄せているかのようなイメージを振りまいた。こうした戦

55) Behrenbeck, op.cit., p.66.

略は、ヒトラーに対してなお懐疑的であった人びとが彼を受け入れることを容易にしたと言えるだろう。

本稿では、「ヒンデンブルク崇拜」と「ヒトラー崇拜」に焦点を当てて、後者を確かなものとするためにいかに前者が利用されたのかを見てきた。こうすることによって、ワイマル共和国から第三帝国への転換の一つの政治的文化的側面に光をあてることができると考えたからである。だが、まだまだ多くの課題が残されている。最後に、今後さらに検討が必要な課題を二点だけ指摘しておきたい。

第一に、受容の問題がある。とくにナチ党による「ヒンデンブルク崇拜」の利用について、当時のドイツ人がこれをどう受け止めたのかについてはほとんど触れることができなかった。そもそもポスターや儀礼などの表象については、意図はある程度明らかにできても、どのように受容されたのかを明らかにするのは非常に困難である。だがそれでも、どのような点から受容の問題に迫ることができるのかについて考えていく必要があるだろう。

第二は、ワイマル期の社会全体に広がっていたとされる指導者待望全体の中に、「ヒンデンブルク崇拜」と「ヒトラー崇拜」をどのように位置づけることができるのか、という問題である。受容の問題とも関連するが、そもそも「神話」は、受け入れる社会の側と崇拜される個人のあいだの相互作用の結果として生み出されるものである。政治的経済的混乱や危機というワイマル期ドイツ社会の全般的な特徴と「ヒンデンブルク崇拜」との関連については本稿でも指摘した。だが、それが他の政治家たちではなく、なぜヒンデンブルクやヒトラーだったのか、期待される「指導者像」はワイマル期を通じてどのように変化したのか、またヒンデンブルクやヒトラーはこの社会の期待の変化をどのように感知し、自らのイメージ戦略にどのように利用したのか、といった問題についてさらに具体的に検討する必要があるだろう。

* 本稿は、平成19年度科学研究費補助金基盤研究（C）「英雄の条件—近現代ヨーロッパにおける軍事的英雄観の展開」（研究代表者：杉本淑彦）による研究成果の一部である。